

青春の賭け

小説 織田作之助

青山光二

中公文庫

青春の賭け

中公文庫

©1978

昭和五十三年二月二十五日印刷
昭和五十三年三月十日発行

著者 青山光二

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙

整版印刷 三晃印刷

カバー トープロ

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七

振替東京二―三四

定価はカバーに表示してあります

青春の賭け

小説 織田作之助

青山光二著



中央公論社

目次

旅行者

一 流行作家

二 最後の夜

三 死の扉口

四 末期の眼

五 浪漫時代

六 街あるき

七 寂しくば

青春の賭け

漂泊

七

七

三

五

三

三

六

二

七

三

「虚」の華やぎ

——戦後・京都の織田作之助——

二三八

文庫版あとがき

二六七

解説

進藤純孝

二六九

青春の賭け

小説 織田作之助

旅行者

私は旅行者だ。ひとり行く地上の巡礼に過ぎない。君たちは果して、これ以上の者たり得るか……。 (ウェルテル)

一 流行作家

昭和二十一年十二月四日の正午ごろ、銀座東二丁目の佐々木旅館を私が訪ねると、織田はまだ眠っていた。まだ、と言うより二、三時間まえにやっと床に就いたばかりという顔つきで、口を少し開け眼も半びらきにして、点^つけっぱなしの電燈に仰向きの顔を真向きに向けて睡っているのだった。それを見たたん^こ此方の身が細るような、如何にも身体の芯からぐったりと疲れきった寝顔なのだ。そして、そんな織田の顔はやはり、二、三年会わぬ間に、何処となくずいぶん変っていた。肉が落ち、頬がガリガリに憔悴^ヒしているのも、血色のまるでないのも昔からのことで、私には、さして殊さらの変化としては映らないのだが、何かそういうのとは別種の変化が、いま友

の寝顔にみとめられる気がする……、という点をふと意識に泛べただけで、私はむろん、それから十四時間後に大咯血をし一カ月後に死ぬべき運命にあるといった人間の顔を、些かもその時、其処に感じたのではなかった。

枕許の卓子テイルの傍を起つて来た昭子夫人に目礼して、すぐ廊下へ引返しかかる私を、「もうすぐ起きますから……」と愛想よく彼女はとめたが、「ちよつと他ほかへまわつて、三十分ほどして又来ます」囁いておいて私は、階段口の方へ出て行つた。

やつとひとまず普請がおわつたばかりと見えるこのバラック建ての、旅館の玄関の硝子戸をしろ手に閉めて路地へ降りると、すぐ隣りにくつついた普請場の木組のあいだをくぐり抜けて、私は道路へ出た。何やらウラウラと白ッ茶けた陽光がいちめんに粉をふいているようで、昼休みどきのためか裏通りもざわついていた。街角を表通りの方へ折れ、やがて私は織るような人の流れにはいつて尾張町の方角へ歩きだした……。

——十月には上京するが、誰にも会わず、君にだけ会うて、あとは女と遊んで帰るよ。

そんな事を八月ごろから私の所へ言つて来ていた織田作之助は、予定よりひと月おくれた十一月中旬、革ジャンパーにはさばさの長髪をなびかせた瘦軀を飄然と東京の街に現したが、さて来てみると「君にだけ会うて」どころか、彼の宿舎・佐々木旅館は連日訪客の絶え間なく、夜は夜でその人たちとの附合いに遅くまで街で時間を過ごすという連続で、私など、戦争を越えて二年

半ぶりに再会していながら彼と二人きりで話す半時間とまとまった機会もとらえられなかった。

織田が上京した頃、ちょうど私は原因不明の熱病で寝こんでいて、十日ほどしてやっと起き出した私がまだふらふらする身体で銀座の宿へ、友に会いに出掛けて行ったのは二十日過ぎになってからのことだった。が、裏通りから宿へ折れ込む路地でぱったり出くわした織田はそのとき、太宰治・坂口安吾との座談会に駆けつけるところで、約束の時間をすでに三十分過ぎていたのだ。しかも、とたんにニコニコと相好くずした笑顔になって、「こんどの日曜日あたり、きみの所へ行こうと思てたんや」と言い、路地へ折れる角にちかごろ開店したばかりの「木村屋」へ先に立ってはいって行こうとする彼を制めて、電車通りの方へぶらぶら歩きながら私はとりとめない会話を彼と、ほんのしばらく交わした。そして、六時に西銀座の酒場「ルパン」で又会う約束をして、座談会場になっている出版社の建物がすぐ向うに見える辺りで別れた。

六時少しまえ地下室の酒場へ降りて行ってみると、三無頼派の姿はまだ見かけられなかったが、彼等を待受け顔の若い編集者たちが四、五名、奥の方にかたまわってカウンターに倚りかかって居り、『サロン』のM・Iと『新小説』のT・Tが私の顔を見て会釈した。二、三日まえ発売されたばかりの『新小説』今月号には、坂口安吾の長い作品といっしょに私の短編も掲載されているのだが、われながら何の調子も出ていない不出来の作で殊に織田には読ませたくなかった。だから、坂口の力作が載っているためだろうが洋酒の壘の並べてある下の飾り棚や、カウンターの遠い端の方などに『新小説』の置いてあるのが私には眼障りでならなかった。坂口の大作を『新小

『説』に取ったのはT・Tの手柄だった。目下のところ、坂口の作品を是が非でも取りたければT・T青年を、高給を以て迎えればよいのだと言われていた。少し以前は、少々調子外れた詩人のM・I青年がその位置にあったというのだが……。間もなく、織田を先頭に座談会の一行がどやどやと、背をこごめながら階段を降りて来た。織田はまっすぐ、私の傍へ来て掛けると、「無茶苦茶の座談会や。さすがの俺も、今日みたいな座談会は始めてだね。行ったら二人とももうベロンベロンでネ」「話にならん……。」「話にもならんし、あれでは記事にもならん」「ならせは男が立たんのじゃないか……。」「ところが立ちそうな男は一人も居らんよ、ふはッはッはッ」というように織田は肩をゆすって笑った。

それから彼は「平野謙氏に紹介しとこうか？」と言って、彼のむこう側にいる人の背をそわそわと敲いたものだ。批評家・平野謙はどうやら今日の、酔っぱらい座談会の司会を仰せつかったものらしく、この迷惑千万な役どころを押しつけた編集者に徐々にからもうと試みているのではないかと見受けられ、今日の座談会を企画した文芸雑誌の編集者であるK・Kは、平野のむこう側にいて且つは閉口、且つはまだ大役から解放されていない興奮から一本気な眼を血走らせていた。そして、平野と初対面の挨拶をしている私にはじめて気づいて、「やア！」と帽子に手をかけた。ふたたび平野が此方に背を向けてK・Kと話しはじめたとき、「立派な顔をしてるね」と彼のことを私が評すると、「うん、川端康成にちょっと似とる」「司会やったんだろ」「気の毒だったよ。何しろ、この顔合わせではねエ！ 酔っぱらいの進行係りはらくじゃない、って悲鳴あ

げてたよ」「すると、顔ほど立派な司会ぶりじゃアなかったわけか」「——顔負けや。ふはッはッはッ」と織田はまた肩を揺りあげ揺りあげして、辺りかまわず笑うのだった。「太宰さんにご挨拶しなくちゃ」という背後の声に私が振向いてみると、『サロン』誌のM・I青年が、眼をパチクリさせる何時もの癖を数倍頻繁に繰返しながら、左手につかんだ無慮七、八十枚もある名刺の束を繰ってどうやら彼自身の名刺を捜している様子。見かねて私は上衣のポケットに手を入れた。M・Iとはほんのひと月程まえ、友人に紹介されて知合ったばかりで、その時もらった名刺をまだ手帳に挿んであるはずと思ったのだ。果してそれはあった。「これ使ったら」さし出すと、M・Iはさすがに恐縮して頭をかきながら受取って、カウンターの折れ曲ったいちばん奥にへばりついて一人でビールを傾けている太宰治の方へ廻って行った。ところが、傍へ行ったM・Iが何か言って頭をさげ、いまの名刺をさし出すと、太宰は相手の顔を見返りもせずの一つ頷いただけで、受取った名刺は眼を触れずにまっすぐ胸のポケットへ、無造作な手つきで落とし込んだ。——そんなありさまを、(二間半ほど離れて)それとなく眺めていた織田は、同様にM・Iの行動を眼で追っていた私を見返って、わが意を得た、というふうに二、三度深く頷いて見せてから、煙草を唇へ持つて行った。そして、「太宰だけは、ほかの小説家とちよつと隔絶してるな。批評家が彼れ此れ文句つけられん場所^{ところ}へ、仕事を持って行てしもたよ。批評家の言う事が気にならんというのは、何しろたいしたもんや。な……？」かねてからの傾倒を披瀝して、感じ入るふうに囁き、念を押すように私の眼を見てさらに頷いた。私も頷き返して、「又(批評家どもが)飽きもせず

にお題目を唱えてる、くらののと、くだろうな」「ボソボソとね！ 十年一日のごとく——」

その時、入口へ寄った方で、「今から行ったって、もう戸締りして皆帰っちゃってますよ。だいいち会計ってものは夕方までだ。坂口さん、明日になさいよ！」そんな事を言って坂口安吾を制しているマスターの声が耳にはいった。が、酩酊した安吾は一徹で、「今日の夕方までに一万円とどけるとP社の方でそう言ったんだ」「だけど金庫に鍵のかかった後へ、行ってみたところでムダじゃありませんか！」「ムダとか何とか、そういう考え方がいけねえんだ」調子よく呟いて哄笑する安吾のうしろに立って、気がなさそうに彼とマスターの応酬を眺めていたT・T青年はそこで、じゃ行つて来ます、と声をかけておいて外套のポケットに両の手をつっこんだまま、身軽に階段を駆けあがつて姿を消した。

面白そうにニコニコして眺めていた織田が呟く。「安吾は相当の人物やけど、たかが一万円のお話で癡を復活して——」とにかく金の事で取り乱すのは、ね。俺なんか、ああいう目に何べん逢うたか、数え切れんくらいだね」「そうだろうな……」「しかし日本の文壇も今や、坂口安吾にあんじよう攪きまわされてるんやから、思えばだらしない話や」「……だけど、安吾は出るべくして出たという所が大いにあるじゃないか」「うん、その点はそれア、当代随一だよ。何ちゅうても『墮落論』だからねエ、売れるにきまつてるよ……」酒量があがつたなどと織田は何時か、言つて来ていたがそれも信をおくに足らず、二人の前のウィスキーグラスは両つながら容易に空

にならなかった。

いきなりフラフラと椅子から降り立った太宰治が、内ポケットから取り出した一枚の百円紙幣をヒラヒラさせた。すると、「此処はいいよ。いいんだ」と離れた所から叫んだのは坂口安吾で、「——太宰には又、払ってもらう時があるよ」太宰はまた百円紙幣をポケットに戻し、宙を踏むような足取りでカウンターを離れて歩きだした。編集者のK・Kが周章^{あわ}てて追い縋^きって合オーバ―を着せかけ、極度に緊張した面持ちで太宰の後に附添って階段をあがって行くのだ。

すると彼等とほとんど入れ替りに間もなく、その途中でひと曲りした狭い階段をアタフタと駆け降りて来たのは、織田のいわゆる外柔内剛型の編集者、『改造』のY・Nであった。彼はまっすぐに織田の傍まで来ると、額から鼻の頭へかけていっぱい汗の玉を浮かせた浅黒い顔をニヤッと綻ばせて私にも会釈し、「どうも遅くなりました——」と突っ立ったまま促すように言ったが、「まあまあ、ひとまず此れへ！」とすすめられて織田の隣の椅子に腰をおろした。今さきまで其処にいた平野謙は、何時の間にか酒場から姿を消していた。「これからまだ何かあるの」私が訊くのへ、『改造』のカンヅメやねん」「徹夜で評論を書いていただくんですよ」二人が答えた。これではヒロポンも打つわけだ、と私は考えながら、『『一流文楽論』のつづきだね』『左様^{そよう}や！（とガクンと音がしそくに織田は頷いて）しかし今度のは少々爆弾評論でね、此れが出れば大家も当分は、枕を高くしては眠れないというやつや」意気当るべからず、いい調子にやってるな、という内心で私は、「新年号?」「いや、十二月号や」「今から書いて、十二月号の間に合うの?」

「三日あれば初校が出ますから」とグラスを唇から離してY・Nが応え、織田も、『改造』あたりになると、さすがにたいしたもんや！」と付け足して編集者に花を持たせた。

「詩か？ 詩は……、俺はあまり好きじゃねえよ」などと三、四人の若い人たちに囲まれて、やむなく文学談を酒の肴にしながら、神田の出版社まで行ったT・T青年の帰りを待っている坂口安吾を残して、やがて私達は酒場「ルパン」を出た。「ルパン」の横丁を裏通りの舗道へ出ると、すぐ其処の喫茶店の扉を乱暴に排して、ちかごろこの辺りでよく見かける^{かすり}のモンペを穿いた花売り娘がとび出して来た。「おい！」織田が呼びとめようとしたが、それより早く彼女は車道を横切って反対側の舗道へ渡って行った。立ちどまってそれを見送っている織田の様子から、彼がこの頭の狂った花売り娘に興味を持っているナ、と私は察した。これから徹夜で、急ぎの仕事があるというのに織田は、「ちょっと寄るやろ？」と誘った。それをことわって私は、「——二、三日したら又、出て来るよ」「そうか……。いっぺん、ゆっくりしよう」こうして肩を並べて夜の街を歩くのは何年ぶりの事か、と私は歳月をあたまに泛べた。(Y・Nは横丁を出た所で出遇った知合いと話しながら、少しおくれて歩いていた。)つまりは其処に、戦争の終った感じがあったのだ。知らぬ間にひと雨降ったらしく仄暗い街はしっとり濡れて、水溜りに映る燈火の色が落着いた懐旧の想いをそそらずにはおかぬ具合である。心斎橋・御堂筋の燈火きらめく街々を二人で、限りもなく歩きまわった放浪無頼の日々が瞬間、私のなかに蘇った。あれから十年が経つ……。ひとむかし……。おのずと織田もおなじ想いなのか、「白崎が死んで、もう一年以上になるなア」

と戦争ちゅう故郷の敦賀で亡くなった白崎礼三のことを口にするのだった。白崎を加えて私達三人は、ご他分に洩れず失うに足る青春を持たなかった私達の、それはそれなりに疾風怒濤シユトルム・ウント・ドラングの時期であつた暗い苦しい青春彷徨時代の、終始かわらぬ同伴者なかつであつたのだ。「一昨年の一月初め、やがて三年だね」「早いもんやなア……」「早いもんやな」二人がほとんど同時に言った。しかしそのおなじ年の八月に織田は愛妻を喪つたのだったと、その時の彼の悲嘆ぶり（と言つてもそれを私は、しきりに孤独・寂寥・虚無をうったえて来た織田の手紙で察しただけで、それ以来、逢うのは今日がはじめてである）をしぜんと心に泛べて私はとたんにドギマギした。相手のいたいたしい傷に触れるのを周章てて避けようとして私は言った。「ずいぶん仕事はするけど、案外元気そうだね。身体こわさない」「身体なんかこわしてる間アがないよ。左様そや、この間アというやつがてんでないね……」「編集者のとぎれる間がないんだろ」「うん、編集者！ こいつは借金取りより手に負えんからね。ケツケツ」というように笑つて織田は、一間ほど後を話しながら来るY・Nの方を悪戯いたづっぽく振返つて見た。

尾張町と数寄屋橋の間の電車通りへ出た所で私は別れるつもりだったが、私が舗道を数寄屋橋の方へ折れると織田はほとんど先に立ってどんだん其方へ足を進め、しゃべりながらなので私はそれをとめるシオがなかった。五尺八寸ゆたかな長身を気兼ねするようにジャンパーの背をこごめ、それでいてケツケツと傍若無人にはしゃぎながら行く、揉みくちやになった毛の運動帽を目深にかぶつた男を、いったい何者かと見返る通行人も多かった。「編集者のいない国へ、一週間